

すずめ

小川未明

青空文庫

冬ふゆの日は、昼ひる過ぎになると、急きゆうに光ひかりがうすくなるのでした。枯かれ残のこったすすきの葉はが黄き色いろくなつて、こんもりと田たの中なかに一ひとところしげ所しげ茂もつていました。そこは低てい地ちで、野や菜さいを作つくることができないので、そうなっているのかもかもしれません。往わう来らいからだいぶ離はなれていました。道みちの方ほうが高たかいので、よくそのあたりの景けし色しきは見み下おろされるのでした。晚ばん方がたになると、すずめたちは、群むれをなして、森もりの中なかの巢すへ帰かえつていくのでしよう。チュン、チュン、鳴なき交かわしながら、空そらを飛とんでいきました。彼かれらが、ちようど、そのすすきのやぶの上うへさしかかろうとすると、ぱつとして、驚おどろいたように、急きゆうに群むれが乱みだれたのです。なぜなら、下したのすすきの中なかで、声こえをかぎり自分じぶんたちを呼よぶ友ともの声こえをきいたからでした。

「どうしよう、だれか呼よんでいるじゃないか。」と、先せん頭とうに立たつて、飛とんでいた一わ羽わが、仲なか間まを見みまわしていいました。

「いいえ、いつてしまおう。」といったものもあります。

「きつと、餌えさがあるから、降おりろというのだ。」というものもありました。

すると、中なかには、

「いや、そうじゃない。どうかしたんだ、助たすけてくれといっているのだ。」と、いったも

のもあります。

こうして意見がまちまちであったので、彼らは、そのまま先へ飛んでいくこともできずに、すすきの生えている上の空を、二、三べんもぐるぐるまわって、話し合っていました。が、こんなことに、かかりあつてはろくなことがないと考える連中は、

「じゃ、僕たちは、先へいくから。」と、その群れは二つに別れてしまいました。「まあ、ああいつて呼んでいるのだ、いつてみよう。」と、残った群れは、それから注意深く下のようすを探りながら、ぐるぐると空をまわってだんだん下へ降りてきました。そのうちに勇敢な一羽は、勢いよく、つういと、その声のする方へ走っていきましました。つづいて、二羽、三羽と、後についてやぶの中へ降りたのです。

このとき、どこからか、さつと雲のような灰色の影が、眼前をさえぎったかと思うと、たちまち網が頭からかかつてしまいました。

「あつ、やられた！」と、思つたときは、もう遅かったのです。網の中に入ったすずめたちは、隠れ場所から出てきた大男の手にかかつて、殺されてしまったのです。

「いま、五羽かかったね。」と、いう声、往來の方から、きこえてきました。

男は、また最初のように、かすみ網をひろげて、落としの口を開けました。そして、

自分じぶんはあちらのやぶの中なかに隠かくれて、おどりのすずめを鳴なかすように糸いとを引ひきました。こうして、鳴なくことに馴ならされたすずめは、しきりに声こえをたてて鳴なきました。

また、前まえのように、どこからか、新あたしくすずめの群むれが飛とんできました。

「おい、どこかで、呼よんでいるものがあるじゃないか。」

「どこだろう。」

「あのくさむらのようだ、早はやくいつてみよう。」

しかしながら、彼かれらは、注ちゆう意いを怠おこたせませんでした。そして、彼かれらの中なかでも、ほかへ気きを取とられずに、まっすぐにいくものもあつたが、どうしても先さきへいきかねて、声こえのする方ほうへ引ひき寄せられるものもありました。やはり、一、二へんすすきの上うへの空そらをまわつてようすをうかがっていたが、男おとこが隠かくれているのに気きづかなかつたと見みえて、六羽わばかり、一度どにさつとすすきの中なかへ降おりました。

男おとこは、あわてたのです。大急おおいそぎで、網あみの口くちを閉とじにかかつたが、すすきの葉はにじやまされて、手てぎわよくできず、ちよつとまごまごするうちに、二羽わ、三羽わ、下したをくぐつて逃にげ出してしまいました。しかし、三羽わばかりは、ついに捕とらえられてしまいました。

「あいつ、また三羽わ捕とつたよ。」と、往おう来らいで見みているものが、いいました。

「ばかなすずめだな、さつさと飛んでいけばいいに。」と、いったものもあります。

このとき、男は、どんな人たちが、見ているのかと、支度をすませてから、道の上をながめました。

そこには、会社員らしい人がいました。小僧さんがいました。また、郵便配達がいました。それらの人たちは、いずれも自転車を止めて、わざわざ降りて、すずめをとるのを見ています。

「どうだ。うまいものだろう。」と、男は、網を張るたびに、かならず獲物がかかるのを、心の中で自慢していました。

「そうさ、これほど、おとりを馴らすのは、容易のことじゃないのだ。まだ暗くなるまでに、幾十羽ばかり捕れるかな。」と、男は、思いました。

見物人の中に、学校帰りの少年が二人いました。

「あのすずめの中のすずめが、鳴かなければいいんだね。」

「助けてくれと鳴いているんだろう。」

「そうかしらん。鳴いているので餌があると思つて降りるんじゃない。」

二人の少年が、そんなことを話していました。すると、先刻網の中から逃げ出した

すずめは、そのまま遠くへいったかと思うと、またもどってきて、田のあぜに立っている。木の枝に止まりました。そして、しきりに、チュン、チュン、と鳴いていました。この時分になると、東の方から、西の方の森を目がけて、帰って行くすずめの群れが後から、後からときました。

「ほら、またきたよ。きつと網にかかるところから。」と、見物人が、いつていますと、すずめの群れは果たして、すすきのやぶの頭にくると、ぐるぐるとまわりはじめました。枝に止まって、鳴いている二羽のすずめは、

「あぶない！ あぶない！」と、いうように鳴きつづけていました。

「おいしい餌があると思つているんだね。」

「そうかしらん。」

二人が、こんなことをいつていると、舞つていたすずめたちは、勢いよくすすきの中へ降りていきました。それよりも、驚いたことは、枝に止まっていた、先刻やつと網の中から逃げ出した二羽のすずめが、これも先を争つて、ふたたびすすきの中へ飛んでいったのを見たことです。

「あつ、みんな網にかかつてしまった。」

これを見ていた二人の小学生は、なんだか息詰まるような気がして、目をみはりました。男は、大急ぎで獲物を片っ端から殺して、袋の中へ入れていました。

「ばか！」と、このとき、大きな声で、どなったものがあります。それは、道の上で見ていた小僧さんでした。

「いいかげんに殺生やめろ！」

こういつて、憤慨した、職人ふうの男もいました。すずめをかわいそうに思ったのは、二人の少年だけではありません。ここに立って見ているものが、みんな心に思うのです。

「やはり仲間が捕まって、苦しんでいるのを助けようとして降りるのだな。」と、配達夫がいました。

「まったくそうらしいですね。」

こんな話を、見ているものがしていました。これを聞いた二人の少年は、

「それごらん、餌を食べたいと思つて、降りるんでないよ。」

「仲間を助けようと思つて降りるんだね。」

こういうことを、二人が知ると、だまされて網にかかるすずめたちが、ほんとうにかわ

先刻、一度逃げ出したすずめが、ふたたび友だちを救おうとして、飛び込んで網にかかった光景を思い出して、いいました。

「すずめって、感心な鳥だね。」と、一人が感心しました。

「僕たちだって、泣いているお友だちを残しておいていけないだろう。」

「いけないな。」

「神さまから、すずめも仲間は、助け合っていくようにと教えられたのだね。」

二人の心は悲しかったのです。西の空は、灰色にだんだん暮れかかりました。すずめのそうした性質を知って、落としにかける男が、憎く思われたのでした。それにもまして、二人は、すずめたちの相互に助け合う心を美しく、貴く感じたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すずめ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>